

# TOBUNKEN NEWS

2009  
no.36



独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所

National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo

〒110-8713 東京都台東区上野公園13-43 <http://www.tobunken.go.jp>

## キトラ古墳天井天文図の 取外し終了

東京文化財研究所では文化庁からの受託事業「特別史跡キトラ古墳保存対策等調査業務」の一環としてキトラ古墳壁画の取外し作業を進めています。2007年7月からは天井天文図の取外しに着手し、2008年11月末をもって作業が終了しました。天文図は漆喰の状態が場所により異なり、天井に向かった作業は困難を伴いましたが、技術の改良を重ね、星座ごとなど合計113片の漆喰片として取外しました。この作業の終了をもって、四神や十二支を含め、石室内で現在確認できる図像をすべて取外したことになります。今後は天文図周辺など無地の漆喰の取外しを行っていく予定です。



天文図取外し作業の様子



天文図取外し作業終了後の天井

また、取外した漆喰片を組み合わせ、天文図を再構成し、将来の展示に向けた作業を進めています。

(保存修復科学センター・坪倉早智子)

## 国際研究集会 「“オリジナル”の行方—文化財 アーカイブ構築のために」の開催

12月6～8日の3日間、東京文化財研究所の主催により、第32回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「“オリジナル”の行方—文化財アーカイブ構築のために」を東京国立博物館平成館にて開催しました。文化財の本質的な価値を損なうことなく、いかにしてその“オリジナル”な姿を後世に伝えてい

くのかを考察しようとする本研究集会では、海外（アメリカ・イギリス・台湾）からの発表者5名をふくむ25名により、発表・討議が行われました。

初日のセッション1「モノ／“オリジナル”と対峙する」では、“オリジナル”を宿すモノと真っ向から対峙するという、文化財に対する基本的な姿勢を問い直しました。つづく2日目のセッション2「モノの彼方の“オリジナル”」では、残されたモノや資料をよすがとして、かつての“オリジナル”の姿を想定する様々な営為を話題に取り上げました。そして最終日のセッション3「“オリジナル”を伝えること」では、それまでの議論をふまえ、“オリジナル”イメージを支え伝える文化財アーカイブのあり方を探りました。

3日間を通じて延べ281名の参加者があり、日本・東洋の美術を中心としながらも、西洋の美学や現代美術、無形文化財をも視野に入れ、とくに文化財アーカイブの立場から“オリジナル”をとらえようとするテーマ設定には多くの関心が寄せられました。本研究集会の事務局を務め、当研究所のアーカイブを担う企画情報部としても、“オリジナル”を志向しながら文化財をいかに資料化していくのか、考えさせられることが多く、今後に向けて取り組むべき大きな課題としたいと思っています。各発表・討議

の詳細については、次年度に報告書を刊行する予定です。

（企画情報部・塩谷 純）

### ドイツ・ケルン東洋美術館における 漆の修復ワークショップの実施

**保** 存修復科学センターでは、平成20年度在外日本古美術品保存修復協力事業の一環として、ドイツ・ケルン東洋美術館において漆の修復ワークショップを昨年度に引き続き行いました。本年は、ワークショップI（初級実習）を受講者10名で11月5日～11月7日の3日間、ワークショップII（初参加者対象）を受講者10名で11月8日、同（学生対象）を受講者7名で11月9日にそれぞれ1日間、ワークショップIII（中級実習）を受講者7名で11月11日～11月14日の4日間の3つのレベル別グループにわけて実施しました。講師は、現地において修復作業を実施して下さった技術者2名です。参加者は、ドイツ国内はもちろん、イギリス、スイス、オーストリア、ポーランドなどヨーロッパ各地から学芸員や文化財の修復技術者さらには学生など、日本の伝統的な漆工品修理に関心が高い人達ばかりでした。ワークショップでは、在外漆工品における修復事例の報告、漆へらつくりや修復実習用の手板を用いた



本研究集会の発表者・司会者一同



修復した漆工品を前にした講義

麦漆による接着や刻字付け、竹ひごによる芯張り実習など多岐に渡りましたが、皆、大変熱心で質問も多く、とても盛況でした。

(保存修復科学センター・北野信彦)

### ワークショップ「中央アジア出土 壁画の保存修復」の開催

平成20年度から、東京文化財研究所は、タジキスタン共和国科学アカデミー歴史・考古・民族研究所と共同で、タジキスタン国立古物博物館が所蔵する壁画片の保存修復作業を行っています。本事業の一環として、12月5日から10日まで、ウズベキスタン、カザフスタン、キルギス、トルクメニスタンから合計6名の保存修復専門家をタジキスタンに招聘し、同博物館においてワークショップを開催しました。

中央アジアの遺跡では5世紀から12世紀の美しい壁画が発見されていますが、それらを保存修復することのできる専門家が不足し、保存修復活動が滞っています。また、この地域には旧ソ連時代に確立した壁画の保存修復方法が普及しているため、強化剤の劣化にともなう壁画表面の変色など共通の問題が発生しています。ワークショップでは、各国の参加者に自国における壁画の保存修復の現状を報告してもらい、また私たちがタジキスタンで行っている新たな試みを紹介し、実際に一連の作業を体験してもらいました。今後も同様のワークショップを開き、日本の専門家と現地の専門家が共に作業を行い、意見を出し合うことによって、中央アジアにおける壁画の保存修復活動の促進と、保存修復方法の改善を目指します。

(文化遺産国際協力センター・影山悦子)

### タジキスタン、アジナ・テパ 仏教遺跡保護プロジェクト

文化遺産国際協力センターは、2006年よりユネスコ文化遺産保存日本信託基金による「タジキスタン、アジナ・テパ仏教遺跡保存プロジェクト」に参加してきました。本年は同プロジェクトの最終年にあたることから、今後の報告書の刊行を目指して、これまでの調査によって出土した遺物の整理や得られたデータの分析を実施しました。作業は10月2日から23日にかけて、タジキスタン国立古物博物館において行いました。出土遺物の多くは、仏教寺院に人が居住していた7世紀から8世紀の土器や日干しレンガの破片です。今回、こうした遺物の中に、印章が押された大甕の口縁部の破片を発見しました。押された印面は大小2つ見られます。大きな丸い印面の中央には坐像が描かれ、像から見て右側に水瓶、左側に錫杖と思われるものが配置されています。大甕の破片はアジナ・テパ遺跡から数多く出土していますが、こうした印章が押されたものは他に見られません。何か特別な用途をもった大甕に印章が押されていたのでしょうか。興味深い発見でした。



坐像の印影のついた土器片

(文化遺産国際協力センター・有村 誠)

### 研究会「文化財の保存環境を 考慮した博物館の省エネ化」の開催

2008年12月4日に、東京文化財研究所セミナー室に於いて「文化財の保存環境を考慮した博物館の省エネ化」というテーマで研究会を開催しました。このテーマに関しては、保存修復科学センターの連携会議で博物館と文化財研究所が連携して行う研究テーマとして同意され、企画されたものです。ここでは、米国ゲティー保存研究所の前川信氏に「博物館・美術館・図書館・資料館での継続性を考えた環境管理方法」、北九州市立大学の白石靖幸氏に「建築物の総合環境性能評価手法と評価事例の紹介」の講演をいただきました。さらに具体的な取り組みについて九州国立博物館および埼玉県立歴史と民俗の博物館から報告をいただきました。参加者は141名であり、活発な討論が行われました。

(保存修復科学センター・石崎武志)

### 第3回無形民俗文化財 研究協議会

無形文化遺産部では、2008年11月20日に、第3回無形民俗文化財研究協議会を開催いたしました。今年度のテーマは「無形民俗文化財に関わるモノの保護」でした。無形の民俗文化財である風俗慣習、民俗芸能、民俗技術などを保護するためには、そのわざを伝えることはもちろんですが、材料や道具、造り物、山車や屋台など、多くのモノを適切に確保し、維持管理していかなければなりません。このような観点から、実際の伝承や保護に携わる関係団体4件の事例報告を聞き、フロアの参加者も

含めて討論を行いました。「使いながら守ること」の難しさや、新たな創造も視野に入れた保護の活動の組織、有形と無形を一体で保護していくための制度づくりなどについて、積極的な議論が行われました。この協議会の内容は報告書にまとめ、2009年3月に刊行予定です。

(無形文化遺産部・俵木 悟)

### 文化財の環境影響に関する 日韓共同研究報告会の開催

保存修復科学センターでは大韓民国・国立文化財研究所（韓文研）保存科学研究室と共同で、文化財における環境汚染の影響と修復技術の開発研究を実施しています。現在は、磨崖仏など屋外環境下にある石造文化財を対象に、劣化原因調査および修復材料・技術の開発評価を行うとともに、年1回、日韓交互で研究報告会を開催しています。

今年度の研究報告会は、2008年11月6日に韓文研講堂にて開催しました。東文研からは、鈴木規夫所長をはじめ6名が参加し、朽津信明・森井順之・山路康弘（別府大学）より石造文化財の保存修復に関する研究成果を発表しました。研究会の前には、慶州・佛国寺多宝塔や感恩寺址三層石塔の修復現場を視察し、修復材料や技法に関して韓国側研究者と議論を行いま



佛国寺多宝塔における病害調査

した。また、大邱・慶北大学博物館を訪問し、大伽耶池山洞古墳群出土品の調査も実施しました。

今後もこうした共同調査を継続し、日本と韓国の研究交流がより深いものになればと願っています。

(保存修復科学センター・森井順之)

### 陝西唐代陵墓石彫像保存修復に関する研究会（西安）

平成16年度以来、西安文物保護修復センターと共同で推進してきた「唐代陵墓石彫像保護修復事業」は、いよいよ本年度をもって終了します。この共同事業においては、毎年一回日中専門家による研究会を開催してきました。第5回目となる今回は、その最終回として、事業の成果を中国各機関・大学等の専門家に披露するとともに、これを機会に石造文化財の保存に関する各種の問題について意見交換と交流を図ることを目的として、11月17日、18日間の日程で、今までより規模の大きな研究会を西安市において開催しました。約40名の専門家が参加し、17日の現地視察に続いて、18日には活発な発表と討論が行われました。研究会の主な内容は以下の通りです。

- ・森井順之（東京文化財研究所）  
「九州白杵摩崖石仏覆い屋建造後の環境観測」
- ・友田正彦（東京文化財研究所）  
「石造遺跡の保存管理—アンコール遺跡群の場合—」
- ・津田豊（（株）ジオレスト：UNESCO 龍門プロジェクト専門家）  
「龍門石窟の結露現象」
- ・方雲（中国地質大学・武漢）  
「順陵石刻の亀裂変形観測」

- ・甄広全（西安文物保護修復センター）  
「石質保護材料研究」
- ・朱一清（中衛康隆ナノ科技発展公司）  
「石質文物保護材料とその評価体系」
- ・万俐（南京博物院）  
「江蘇句容貌山華陽洞摩崖題刻の保護」
- ・馬濤（西安文物保護修復センター）  
「乾陵石刻の表面保護処理」  
(文化遺産国際協力センター・岡田 健)

### 研究会「屋外等の木質文化財の維持管理」の開催

保存修復科学センターでは、文化財の生物劣化対策の研究の一環として、2008年10月6日、当所セミナー室において標記の研究会を行いました。今回は「屋外等の木質文化財の維持管理 問題点と今後」をテーマに、寺社等建造物や木彫像の管理の生物被害上の最近の問題点について、奈良県教育委員会の神田雅章氏から、わかりやすく明確な問題提起をいただきました。また、京都大学の藤井義久氏（当研究所客員研究員）から、文化財建造物の劣化診断と維持管理体制の課題について、的確な指摘がありました。九州国立博物館の本田光子氏からは、屋外で公開された文化財などを博物館内で展示・収蔵する際の対応について具体的なお話をいただきました。さらに、建築家の河上信行氏より、「弥生時代等の復元建物における維持管理の現状と課題」についてのお話があり、吉野ヶ里遺跡などを例に、掘り下げた議論を行う機会となりました。屋外の木質文化財の保存には、難しい問題が山積しており、今後、プロジェクトの中で具体的方策を検討していく所存です（参加者79名）。

(保存修復科学センター・木川りか)

## 中級研修—空気環境最適化の ための基礎と実践—を試行して

**博** 物館・美術館等保存担当学芸員向けに、大気や室内空気汚染物質の性質、被害例、制御方法、監視計画の立て方、対策の実施例などを総合的に学ぶ研修を試行しました(12月15-16日、参加者40名)。「汚染物質計測のための仕様書を策定し、報告書を読みとき結果を評価し、建築設計や空調設備技術者と対策について検討することができる力を身につける」を目的に、最先端の研究成果や技術的内容を含む、やや難しい講義・実演が続きましたが、参加者はみな真剣に取り組んでいました。用語集の提供、必要な機器・スペース等の情報が得られたことについて評価が高く、将来ネット上での公開希望が多数寄せられました。

(保存修復科学センター・佐野千絵)

## イラク人専門家の人材育成事業

**文** 化遺産国際協力センターでは、イラク国立博物館の保存修復室の復興のために、研究所の運営費交付金およびユネスコ文化遺産保存日本信託基金をもとに、人材育成・技術移転を目的とした保存修復研修を実施してき



遺構のはぎ取り実習(静岡県埋蔵文化財調査研究所)



金属遺物の保存修復実習(奈良文化財研究所)

ました。研修コースは2004年度に始まり、本年度で5年目となります。招へいした保存修復の専門家はのべ14名となり、木製品、金属器、土器、粘土版など、さまざまな対象物をテーマとした研修を実施してきました。

本年度は、イラク国立博物館より保存修復室長のブタイナー・M・アブドゥルフセイン氏、修復家のタームル・R・アブドゥアラー氏の2名の保存修復専門家を招へいし、2008年7月1日から12月10日の約半年間にわたり、主に木製品の保存修復研修とそれに関連する保存修復技術の習得のための実習を実施しました。

研修は、奈良文化財研究所、静岡県埋蔵文化財調査研究所、九州国立博物館および国内の保存修復機関の協力を得て行いました。保存修復の実習として、木製品の保存修復(東京文化財研究所)、金属遺物の保存修復(奈良文化財研究所)を実施しました。また、木材に関する基礎的な科学調査(静岡県埋蔵文化財調査研究所)や3次元CTスキャナをはじめとする最新の分析機器など(九州国立博物館)について学びました。文化財を構成する材料の分析や劣化のメカニズムを科学的な視点からとらえる良い機会となったことに、二人の研修生も非常に満足していました。

6か月にわたる長期の研修でしたが、両研修

生は意欲的に取り組んでいました。今回の研修成果をイラク国内の文化財の保存修復の現場で生かしてくれることを願います。

(文化遺産国際協力センター・宇野朋子)

### アフガニスタン人考古学 専門家の人材育成事業

バーミヤーン遺跡保存事業の一環として7月半ばから始まったアフガニスタン人専門家の考古学研修は、12月半ばに全日程を終了しました。ケターブ・ハーン・ファイズィー氏とロフッラー・アフマドザイ氏の研修生2名は、5ヶ月に及ぶ研修を終え、12月22日に帰国の途に着きました。

今回の研修では、東京文化財研究所だけでなく、東京都埋蔵文化財センター、流山市教育委員会、奈良文化財研究所など、さまざまな機関の協力の下、実習が行われました。研修生たちは、各機関が実施している発掘や研究の現場に参加することで、発掘方法や遺構・遺物の実測の仕方について実地に学びました。アフガニスタン人研修生にとって、慣れない日本での長期にわたる研修は、なにかと苦労も多かったようですが、多くの方々のおかげで、考古学の専門知識や技術の習得だけでなく、日本の生活や文化に親しむことができ、充実した研修期間を過ごせたようです。

12月17日には、研修のまとめとして、研究所内で研修成果発表会が開かれ、研修で学んだことやアフガニスタンの最新考古学情報について、研修生から報告がありました。文化遺産国際協力センターでは、今後もこうした研修を通じて、アフガニスタンの文化財保護に関わる人材の育成に協力していく予定です。

(文化遺産国際協力センター・有村 誠)

### 韓国国立文化財研究所での研修

2008年6月に韓国国立文化財研究所無形文化財研究室との間で合意に達した「無形文化遺産の保護に関する日韓研究交流」にもとづき、無形文化遺産部の俵木が、2009年10月、韓国において二週間の研修を行いました。今回の研修の目的は、韓国における無形文化遺産の映像記録のアーカイブの現状を調査し、それを日本の無形文化遺産の記録の管理と活用役に立てることです。韓国では国立文化財研究所が積極的に無形文化遺産の映像記録作成を行っており、それらは国家記録院や韓国映像資料院といった機関と連携して管理されています。その組織的な管理体制には学ぶべき点が多いと感じました。また、研究所が作成した記録映像がテレビ放送の素材になるなど、積極的な活用の実態も印象的でした。無形文化遺産部では現在、日本の無形文化遺産の記録の所在情報のデータベース化の作業を行っており、今後はこうした方面での両国の情報共有などについても検討していきたいと思っています。

(無形文化遺産部・俵木 悟)

### シルクロード人材育成 プログラム土遺跡保護修復班終了

中国文化遺産研究員と共同で実施する「シルクロード沿線文化財保存修復人材育成プログラム」土遺跡保護修復班の第3年目の研修が9月1日から2カ月間、甘粛省瓜州市で実施され、10月31日には3年間合計7カ月の研修を締めくくる修了式が同市においてとりおこなわれました。土遺跡とは日干しレンガを積んで構築した地上の建造物、考古発掘作業によって地下から出現した土構造の遺跡を指しま

す。日本には考古遺跡の保存例は多数ありますが、地上のものとしては、完全に土を材料として作りそれが乾いただけのものという意味ではほとんど例がなく、自ずから修復保護の経験も乏しいジャンルです。しかし、西アジアから中国に至るシルクロードの各地に残るこれらの遺跡は、まさにその東の果てに位置する日本へ西方の文化が伝えられた、いわば道しるべのような存在ですから、その保護のための人材育成に協力することは、とても重要な意味があります。これまでイランや中央アジアの各国でも日本の専門家による修復協力活動が行われてきました。今回の研修では、瓜州のゴビ灘（砂利の沙漠）に築かれた2,000年前の墓の土製の門柱を対象として修復の実習作業を行いました。13名の研修生は、これまで2年間5カ月の研修によって身につけた概念と理論を駆使し、現場での調査や観察をもとにした検討を通して、この遺跡に最も相応しい修復と保護の状態を考え、実際の修復作業も行い、工事を完成させました。さらに、3年間の研修を集大成する報告書を作成しました。彼らはそれぞれの地域に戻り、地域のリーダーとして土遺跡の保護に従事していくものと期待されています。

（文化遺産国際協力センター・岡田 健）

### 敦煌派遣研修終了

6月1日から敦煌研究院へ派遣した佐藤香子さん（東京学芸大学大学院修士課程修了／保存科学専攻）と倉橋恵美さん（筑波大学大学院修士課程修了／日本画専攻）の研修が終了し、10月19日に無事帰国しました。この間、2人は莫高窟の宿舎に泊まりながら、敦煌研究院の全面的な協力を得て、壁画の現場調査、分析研究、保存処理作業の実習、壁画構造の再現

制作と模写、世界遺産莫高窟の管理運営に関する講義など、壁画のみならず、文化遺産の保護に関する全面的な内容についての研修を受けました。また個人研究のテーマとして、佐藤さんは壁画に使われた赤色の色料についての分析・比較研究を行い、倉橋さんは科学的研究を根拠としながらの復元模写に挑戦し、その結果は最後の発表会において敦煌研究院の研究者からも高い評価を得ることができました。現場での貴重な体験とともに、同世代の敦煌研究院の仲間たちとの出会いと交流は、今後2人がそれぞれの道を歩む上できっと大きな意味を持つことでしょう。この研修は、あと2年間の実施を予定しています。

（文化遺産国際協力センター・岡田 健）

### 第3回無形文化遺産部 公開学術講座

無形文化遺産部公開学術講座を、12月16日に国立能楽堂大講義室で開催しました。無形文化遺産部では、平成18年度より、文化財保護委員会（現在の文化庁）が作成した音声記録を講座の題材に取り上げています。今年度は、「音声資料からたどる能の変遷」と題して、能囃子の記録を紹介しました。

昭和26年度に作成された能囃子の記録は、大鼓の川崎九淵、小鼓の幸祥光、この二人の演奏を録音することが主たる目的だったようです。川崎九淵と幸祥光は、昭和30年の第1次重要無形文化財保持者各個認定を受けています（いわゆる「人間国宝」）。講座では、文化財保護委員会が作成した記録の意義や現在の伝承との関りについての解説を交えながら、大正・昭和の能を支えた二人の至芸を聴いていただきました。来年度も、文化財保護委員会作成音声資

料を題材に、講座を開催する予定です。

(無形文化遺産部・飯島 満)

## 第42回オープンレクチャー 「人とモノの力学」

2008年10月8日、9日の2日間にわたり、研究所地下セミナー室を会場に、上記の公開講座を開催しました。第1日目は、勝木言一郎（企画情報部）「鬼子母神の源流をたずねる」、中川原育子（名古屋大学文学部）「クチャ地域の石窟に描かれた供養者像とその信仰について」の2発表があり、いずれも仏教美術の

源流をたずねるテーマでした。翌日は、田中淳（企画情報部）「写真のなかの芸術家たち—黒田清輝を中心に」、青木茂（文星芸術大学）「明治10年・西南戦争と上野公園地図」があり、前者の発表は、写された写真をもとに画家の創作と生活を考える内容であり、後者の発表は、明治10年に制作された「上野公園地実測図」（銅版画）をもとに、同地の歴史の変遷をたどるものでした。一般の聴講者は、第1日が150名、第2日が127名を数え、アンケートの結果をみても、好評だったことがわかりました。

(企画情報部・田中 淳)

## “オリジナル”と現代美術—福田美蘭《湖畔》の展示



黒田清輝《湖畔》(左)と福田美蘭《湖畔》(右)の展示風景

12月6～8日に開催する国際研究集会「“オリジナル”の行方—文化財アーカイブ構築のために」の関連企画として、現代美術家の福田美蘭氏による《湖畔》(1993年作)を10月9日より東京国立博物館黒田記念館で展示しました(12月25日まで)。「湖畔VS湖畔」と題したこの企画は明治の洋画家、黒田清輝の代表作《湖畔》にもとづく福田氏の作品を、黒田記念館で常時公開されるオリジナルとともに

展示したものです。気鋭の現代美術家である福田美蘭氏は古今東西の美術品を素材に作品を制作、その“オリジナル”イメージを揺さぶる活動で知られています。今回展示した福田氏の《湖畔》も、黒田の《湖畔》の背景を延長して描くことによって、教科書や切手などですっかり見慣れた名画のイメージを一度くつがえし、再度新たなまなざしで原画に接するよう促して

(p.14へ続く)

## Column

## オリジナルを守る

近代化遺産と分類されている文化財には動産・不動産を含め非常に多様な種類の物が含まれています。いわゆる不動産として認識される、レンガ造やコンクリート造の建物や鉄製の構造物などの保存修復に関しては、概ね近世までの手法が適用されていますが、近世の建物には使われていない材料に関する修復技術は、適用し難いケースも多々あり、大きな問題となっています。ただ、保存修復に関する考え方は近世までのものを踏襲している場合が多く、同一材料、同一技法であれば許容されます。確かに、建物や構造物の場合、地震などに対する強度を無視して存在することはできません。特に日本のように、地震が多い国では、ヨーロッパなどと違い、保存修復の際でも、構造強度に関する検討は非常に重要であり不可欠です。だからと言って、修復が必要な箇所をあっさり新替えしてしまうとよいのか、その部分のオリジナルはどうになってしまうのか、見方が大きく分かれるところです。現在、レンガ造の建物で、修理工事が行われる場合に、耐震強度の確保の手法がいくつか採用されています。

- ・レンガ造の壁の中に上下方向あるいは斜めに穴を明けて、芯となる部材を差し込み強度を持たせる方法。
- ・建物の中あるいは外に鉄骨などを使って新たに骨組みを作り、建物自体の倒壊を防ぐ方法。
- ・レンガ壁内面に炭素繊維シートを張り込み、壁の補強をする方法。

などです。今のところどれが優れているという様な評価はされていません。いずれも、基本的にはオリジナルのレンガ壁に手を入れる範囲は最小限になるように工夫されています。

一方、コンクリート造や、鉄製構造物の場合、劣化してしまった当初の材料を使いながら、耐震強度や構造強度を確保するのは技術的に非常に困難です。どうしても、部分的には新材に交換しなければいけません。ここでも見方が分かれると言いたいところですが、現在のところ、やはり、強度確保は至上命題ですから、それを無視した議論は成り立たないことになり、やはりある程度までオ



読書発電所（長野県）

オリジナルが失われても、構造強度の確保を優先するというのが現在の流れです。これは地面とつながっている物すべてに共通する問題です。

次に、航空機、車、船、電車や機関車などの乗物から、それらを生み出してきた工場で使われていた工作機械、製作機械や組み立て用の機械などに関して、どうなっているのでしょうか？これらの文化財は、また別の意味で近世までの文化財と一線を画しています。これら、いわゆる美術工芸品に分類される物に関しては、基本的に、オリジナルを守るという考え方が一般的だと思いますが、これらの文化財は、もともとは何らかの動きを持ったものであり、物によっては今でも動かすことが可能なものがたくさんあります。むしろ所有者の中には動かすことに価値を見出している方もおられます。それについても見方はいろいろであり、一概に決めつけることはできませんが、動かすということには次のような利害得失があります。

- ・動かすことで、消耗する部品が必ず出てきます。それが原因で交換することになるとオリジナルが損なわれる原因となります。
- ・動かすことで、その機械の機構や動く仕組みの理解が深まり、その機械が設計され制作された当時の考え方などがよく分かる。

これらのことを踏まえた上で、慎重な判断が求められます。

また、動産・不動産を問わず、近代文化遺産の中には、勝鬨橋や読書発電所のように供用されながら国指定の重要文化財となっているものが多数あります。これらのように現役でありながら重要文化財でもあるというものを保存修復する場合にはやはり供用されていることによる機能の保持が優先されることは自明であり、文化財としての必要な配慮はその次になってしまいます。しかしながら、そのような中でも、失われてしまっただけではいけない文化財としての価値もあるので、それを守るために十分な検討が必要となります。このように、近代化遺産には、これまでになかった特徴があり、それを理解した上で様々な問題解決に望むことが重要です。



勝鬨橋（東京都）

（保存修復科学センター・中山俊介）

## Column 2


 研究所昔語り：東大寺二月堂修<sup>しゅにえ</sup>二会の調査研究


「芸能」、とは演劇や舞踊、音楽、話芸など、人間の身体を用いて表現をする形の残らない芸術活動をさす用語です。昨今では芸能界、芸能人といった用法がポピュラーですが、能楽、文楽、歌舞伎などの鑑賞芸能が日本の伝統芸能として認められていますし、地域の生活に根ざして各地で数多くの民俗芸能も行われています。

芸能部が研究対象に選んだ寺院行事、法会是一般には芸能とは認められていませんが、僧侶によって唱えられる声明の美しさ、洗練された所作、という点で芸能としてとらえるべきではないか、というのが部の主張でした。法会を「<sup>ほうえ</sup>寺事<sup>てらごと</sup>」と名づけた横道萬里雄は、「仏教では仏法僧の三宝ということをいうが、広義の「仏」を芸術的に表現したのが仏教美術であるなら、「僧」によって「法」を芸術的に表現したものが、仏教芸能すなわち寺事と言えるのではないだろうか」と述べ、典礼芸能という語を考案しています。寺院で行われる仏教行事を、宗教行事ではなく体现芸術として見ようという視点を打ち出したのです。

法会で唱えられる声明は、能楽や平曲の発生、伝承に計り知れない大きな影響を与えました。法会

では雅楽も演奏されましたから、法会は日本の芸能の母胎といってもよく、寺院行事の解明は、日本の伝統芸能の伝承解明に欠くことができない重要性を有しているのです。

数ある法会の中で最たるものとして、大規模に調査を行ったのが、東大寺二月堂修二会（俗称お水取）でした。年の初めにその年の安穏豊稔、除災招福を願って行われる法会ですが、天平勝宝4年始行と信じられ、不退の行として東大寺が焼失した年ですら滞ることなく毎年勤修<sup>こんしゆ</sup>されてきました。

現在では、2月20日から2月末日まで、法会の準備を行いつつ身を清浄に保つ「<sup>べっか</sup>別火」を行ったところで場所を二月堂に移し、3月1日深夜から15日の未明にわたって1日に6回、本尊の周りを行道し、本尊の御名を讃歎し礼拝をくりかえします。6回とも少しづつ所作や唱えるフシを



東大寺二月堂修二会勤行中の僧侶  
写真：吉越立雄

変えていますが、声明のフシの美しさ、リズムのおもしろさ、洗練された所作の美しさは独特です。そのほか日によって付帯する行事があり、東大寺ゆかりの人々の過去帳を読む日、天上で行われている行に追いつかんと堂内を走って行道する「走り」、堂内で松明を引き回す「<sup>だったん</sup>達陀」など、複雑に入り組んだ次第のなかには民間の祈年習俗や神道、修験などと共通した要素も融合され、さまざまな点で聴聞者を魅了してやまない法会となっています。

堂内は女人禁制、別火中はさらに厳しく調査は制限されますが、この調査を中心になっておこなったのが佐藤道子でした。1967（昭和42）年から6年間、集中的に調査をおこない、紀要『芸能の科学』6,7,12,13号（1975・1977・1980・1982年）に、行事の次第や内容、所作、声明について詳述しました。これは法会研究の嚆矢として外部の研究者から高く評価されましたし、この調査に基づいてビクターが1971年に作成した6枚組のレコード『東大寺修二会 <sup>かんのんげか</sup>観音悔過』は、同年度の芸術祭優秀賞を受賞し、寺事の重要性を広くアピールすることとなったのです。

宗教行事の一環として、現在では重要無形文化財の指定対象にはなりえないジャンルですが、対象にならないからこそ、また他機関では行にくい面があるからこそ、国立の機関でおこないえた重要性は大きいと言えるでしょう。非公開の部分も多く、寺院からの配慮をいただかなければ調査はかないませんでした。寺院との深い信頼関係を築いたからこそ長年にわたる調査を完遂できた、その意義を大切にしたいと思います。



手書きの調査報告を載せた  
「芸能の科学」全4冊



ビクターレコード  
「東大寺修二会観音悔過」の解説書

（無形文化遺産部・高桑いづみ）

います。廊下をはさんで、向かいあうように飾られた黒田の《湖畔》と福田氏の《湖畔》のコラボレーションを、来館者の方々もやや戸惑いながら楽しんでいたようです。

なお10月8日には森下正昭氏（当研究所客員研究員）の発表による、国際研究集会に向けての部内研究会を行いました。「美術館とオリジナル—コンテンポラリーアートをめぐる問題」と題した発表では、主にイギリスの現代美術を中心に、作家自らが制作したモノ、という旧来の作品概念を超えた活動を紹介し、それらをどのように伝えていくのか、という現代美術館の課題が浮き彫りにされました。作品がコンセプト化するなかで、とくに作家へのインタビュー等を記録して現代美術を伝えようとするInternational Network for the Conservation of Contemporary Art (INCCA)の活動は、作品保存の今日的なあり方として興味深いものがありました。

（企画情報部・塩谷 純）

### アジャンター石窟壁画の保存 修復に向けた調査研究事業に 関する合意書の締結

11月21日、インド・ニューデリーにおいて、東京文化財研究所とインド考古局（ASI）は、アジャンター石窟壁画の保存に向けた調査研究事業の合意書を締結しました。

アジャンター石窟には、前期は紀元前1世紀から紀元後2世紀にかけて、後期は5世紀後半から6世紀にかけての貴重な仏教壁画が数多く残されています。しかしながら、岩盤自体の構造的な問題、雨期の大量の冠水による損傷、こうもりの排せつ物や煙によると考えられる黒色付着物などが原因で、劣化が進んだ状態にあり

ます。このような問題に対処すべく、当研究所は、文化庁の委託による「文化遺産国際協力拠点交流事業」の枠組みにおいて、平成20年度から22年度にかけて、アジャンター第2窟及び第9窟を対象とした調査を実施します。保存修復のための技術及び材料に関する知識、専門的技術、経験をインドと日本の専門家が交換・共有することで、双方の技術と能力の向上を目指します。

（文化遺産国際協力センター・鈴木 環）

### 故鈴木敬先生の蔵書寄贈

東京大学名誉教授で、学士院会員の故鈴木敬先生（平成19年10月18日逝去、享年86）の蔵書が、当研究所に寄贈されました。ご遺族である輝子夫人からのお申し出により、蔵書中から『景印文淵閣四庫全書』全1,500冊及び500冊を超える『四部叢刊初編縮本』、『大清歴朝実録』が12月11日に搬入されました。『四庫全書』は、ひろく知られているように、清朝乾隆帝の命により編纂された中国最大の漢籍百科叢書として高い価値があります。当研究所では、中国絵画史の泰斗でいらした先生の学術的な業績を顕彰し、あわせて貴重な資料の活用と保存を考え、多くの研究者にご利用いただけるよう、整理作業をすすめています。なお次年度には「鈴木敬氏寄贈図書目録」（仮称）も刊行する予定です。

（企画情報部・田中 淳）

### 寄付金の受入れ

東京美術商協同組合から、当研究所における文化財に関する調査・研究等の成果の

(p.16へ続く)

## 刊行物のご案内



## 『懷素自叙帖検測報告』

台湾の國立故宮博物院との共同調査研究報告書。卓抜な草書で知られた懷素により8世紀後半に制作された自叙の卷子本を、高精細撮影、赤外線撮影などにより精査し、制作、伝来に関する諸説に再考を促すこととなりました。2005年、國立故宮博物院（＋886-2-2881-2021）、定価800円



## 『木村莊八日記（明治篇）校註と研究』

画家、文筆家として知られる木村莊八の明治44年から大正2年までの日記を翻刻し、詳細な脚注をつけたもの。翻刻に加え、諸分野からの研究論文8編により莊八の営為を多角的に論じています。2006年、中央公論美術出版（03-3561-5993）、定価12,600円



## 『日本の楽器』

第25回国際研究集会の報告書。音楽・美術・工芸など様々な視点から楽器を総合的にとらえた画期的な報告書です。2003年、出版芸術社（03-3944-6250）、定価5,250円



## 『DVD文化財生物被害防止ガイド』

『文化財生物被害ガイドブック』をテキストにDVDを見ることで、IPMによる害虫対策の流れや実際の処理法の具体的なイメージがつかめます。2004年、（株）クパプロ（03-3238-1689）、定価4,410円



## 『未来につながる人類の技 3－鉄道の保存と修復 I』

「未来につながる人類の技」シリーズの第3巻目。近代の文化遺産の中でも親しみのある鉄道車両及びその関連施設について国内及び海外における保存、活用の事例を紹介しています。2004年、オフィスHANS（03-3400-9611）、定価2,800円



## 『アフガニスタン流出文化財の調査－バーミヤーン仏教壁画の材料と技法－』

アフガニスタン文化遺産調査資料集第3巻  
東京藝術大学と共同し、日本で保管されているバーミヤーン壁画の材料と製作技法を、非接触的な方法で記録・調査した報告書です。2006年、明石書店（03-5818-1171）、定価9,975円

公表にかかる出版事業の助成を目的として、また（株）東京美術倶楽部から当研究所における研究事業の助成を目的として、それぞれ寄付金のお申し出がありました。東京美術商協同組合からは、2001年秋から毎年春と秋に各100万円のご寄付をいただいております、今回で14回目となり、（株）東京美術倶楽部からは、2006年秋から春と秋に各100万円のご寄付をいただいております今回で4回目となります。

11月28日に東京美術商協同組合（理事長：

下條啓一）並びに（株）東京美術倶楽部（代表取締役社長：浅木正勝）から寄付の振込があり、受領いたしました。また、今回は、東京美術商協同組合下條啓一理事長並びに（株）東京美術倶楽部浅木正勝代表取締役社長が多忙につきお会いする機会は得られませんでした、当研究所の事業にご理解を賜りご寄付をいただいたことは、当研究所にとって大変有難いことであり、研究所の事業に役立てたいと思っております。

（管理部・後藤嘉信）

### 所長表敬訪問（海外）

| 年月日      | 来 訪 者                                   |
|----------|-----------------------------------------|
| 20.10.20 | インドネシア・ボロブドゥール遺産保存事務所所長マルシス・ストポ氏他1名     |
| 20.11.11 | モンゴル・教育文化科学省文化芸術局局長エルデネバット・ジェンデンダラム氏他5名 |
| 20.11.25 | 中国・故宫博物院文物保護科技部副主任苗建民氏他5名               |
| 20.12.16 | ユネスコ事務局・前無形文化遺産課長リーク・スミーツ氏              |
| 20.12.17 | 駐日アフガニスタン大使ハルン・アミン氏                     |

管理部・崎部 剛

### 黒田記念館公開日カレンダー

●公開日：木曜・土曜 午後1時～4時 入館料：無料

| April 4 |    |    |    |    |    |    | May 5 |    |    |    |    |    |    | June 6 |    |    |    |    |    |    |
|---------|----|----|----|----|----|----|-------|----|----|----|----|----|----|--------|----|----|----|----|----|----|
| 日       | 月  | 火  | 水  | 木  | 金  | 土  | 日     | 月  | 火  | 水  | 木  | 金  | 土  | 日      | 月  | 火  | 水  | 木  | 金  | 土  |
|         |    |    | 1  | 2  | 3  | 4  |       |    |    |    |    | 1  | 2  |        | 1  | 2  | 3  | 4  | 5  | 6  |
| 5       | 6  | 7  | 8  | 9  | 10 | 11 | 3     | 4  | 5  | 6  | 7  | 8  | 9  | 7      | 8  | 9  | 10 | 11 | 12 | 13 |
| 12      | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 10    | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 14     | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 |
| 19      | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 17    | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 21     | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 |
| 26      | 27 | 28 | 29 | 30 |    |    | 24/31 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 28     | 29 | 30 |    |    |    |    |

### 編集後記

●36号は10月から12月までの活動が記事として掲載されています。爽やかな秋に相応しく、多くの研究成果が国際シンポジウムや研究会、あるいは研修などを通じて、国の内外へと広がっていたことがうかがわれます。

（企画情報部・勝木言一郎）

TOBUNKENNEWS no. 36

発行日：2009年2月28日

独立行政法人国立文化財機構

発行：東京文化財研究所

印刷：よしみ工業株式会社

編集：企画情報部